

# 長射程ミサイル

## 大分に配備検討

防衛省方針

防衛省は2024年度末、陸上自衛隊湯布院駐屯地（大分県）に新たな地対艦ミサイル連隊を発足させる方針を決めた。

関係者によると、政府が保有を決めた敵基地攻撃射程ミサイルを運用することを想定しているといふ。このミサイルは南西諸島への配備も検討されており、九州・沖縄への配備が本格化することになりそうだ。▼1面参照

防衛省が31日に公表した24年度当初予算概算要求で、部隊新編の関連経費約39億円を盛り込んだ。防衛省によると、新設されるミサイル連隊は

約290人で発足。敵艦艇を攻撃する陸自の国産ミサイル「12式地対艦誘導弾」を運用する。防衛省が射程を約200キロから約1千キロに伸ばす能力向上型を今年度から量産しており、26年度に部隊へ配備する予定だ。

これらの長射程ミサイルについて、政府は相手の射程圏外から攻撃でき

る「スタンド・オフ・ミサイル」と位置づけ、昨年末の安全保障関連3文書に保有を書き込んだ。

運用部隊のうち、地対艦ミサイルを扱う連隊については全国に七つ設置す

るとも記述。湯布院駐屯地に新設される連隊もこ

の一つとなる見通しだ。

大分県では、防衛省がすでに陸自大分分屯地（大分市）に弾薬庫を設ける計画を進めており、大型ミサイルを保管できる環境が整いつつある。

ある自衛隊幹部は「スタンド・オフ・ミサイルの受け皿だ。中国への一定の牽制になる」とし、

別の幹部は「本来なら先に沖縄に配備したいが、反発が大きい。大分への配備を打ち出し、有事の際に南西諸島に展開することを想定している」と明かす。ただ、地元では住民が反対する動きもある。

現在、射程を伸ばす前の12式地対艦誘導弾を運用しているのは奄美大島（鹿児島県）、宮古島（沖縄県）、石垣島（同）、熊本県の各部隊。今年度末には沖縄本島の陸自勝連分屯地に、新たな地対艦ミサイル連隊ができ、南西諸島の各部隊はこの連隊の指揮下に入る。熊本県にある既存の連隊も含め、スタンド・オフ・ミサイルを運用する方向で検討されるが、勝連の部隊についても市民団体が抗議している。（成沢解説）

9/1 朝日